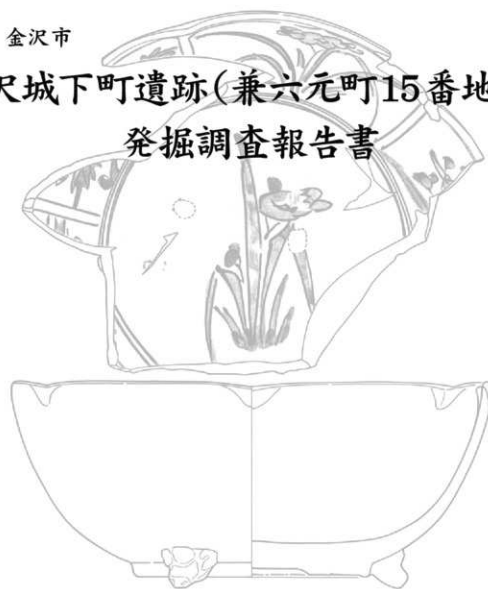


石川県 金沢市

金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)

発掘調査報告書



令和2年3月
(2020年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県 金沢市

金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)
発掘調査報告書

令和2年3月
(2020年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例 言

1. 本書は、石川県金沢市兼六元町19番1、20番、21番1、21番3、22番1に所在する金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）の発掘調査報告書である。
2. 金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）は、シオタニ株式会社による有料老人ホーム新築工事に伴い、平成30年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査の期間、面積は次のとおりである。
期間：平成30年（2018）7月13日～平成30年9月27日 調査面積：202㎡
4. 発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長 小嶋芳孝氏、委員 横山方子氏、米沢義光氏、藤田邦雄氏）の指導の下で、谷口宗治（文化財保護課担当課長補佐）が担当した。
5. 本書の編集・執筆は、新出敬子（文化財保護課主査）、遺物写真撮影は庄田知充（文化財保護課主査）が担当した。
6. 本発掘調査・整理作業にあたりシオタニ株式会社から多大な協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる。
7. 屋内整理および製図は、次の方々に協力していただいた（50音順、敬称略）。
井川明子、蟹ヤエ子、谷森真利、寺西悦子、土橋裕美、供田奈津子、畑尾ゆか
8. 本書の遺構図の指示は以下のとおりである。
 - (1) 遺構図の方位は全て座標北である。座標は世界測地系に基づく国土座標第Ⅶ系（測地成果2000）に準拠している。
 - (2) 各図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも示している。
 - (3) 土層の色調は小山正忠・竹原秀雄2006『新版標準土色帳』（日本色研究事業（株））による。
 - (4) 遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル（m）で記した。
 - (5) 遺構名は、石垣、石列の他、SK：土坑、SD：溝などの略号を用いた。
9. 本書の遺物の記述には、下記の分類編年案による時期設定や分類を引用した。
土師器皿の記述には滝川重徳氏による分類（滝川2002）を利用した。陶磁器の年代観のうち、堀内秀樹氏等による陶磁器編年案（堀内・成瀬2001）を引用した箇所については東大編年と略称した。瀬戸陶磁器については藤澤良祐氏による案（藤澤1998）を引用した。越前陶器については木村孝一郎氏による案（木村2004）を引用した。
10. 本書に収録した遺物は、全て金沢市教育委員会が一括して保管している。

金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）発掘調査報告書 目次

第1章 調査に至る経緯と調査の概要	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 遺構と遺物	7
第4章 総括	22

測量図版

写真図版

第1章 調査に至る経緯と調査の概要

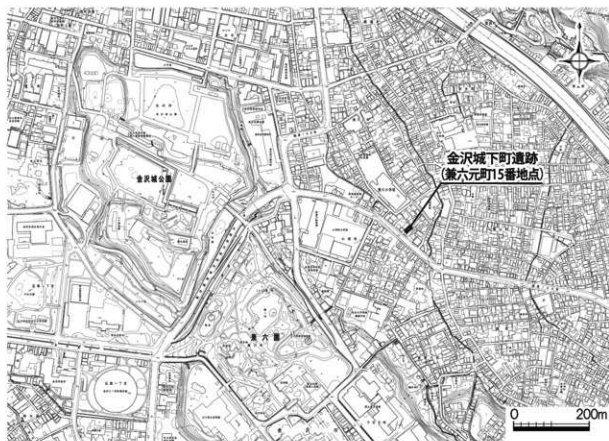
第1節 調査に至る経緯と経過

金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）は、平成29年度に計画されたシオタニ株式会社による有料老人ホーム新築工事に伴い発掘調査を行った遺跡である。

平成29年（2017）、シオタニ株式会社から金沢市兼六元町地内で有料老人ホーム新築工事を行うにあたり埋蔵文化財確認調査依頼が文化財保護課に提出された。これを受けて同年11月17日に試掘調査を実施したところ、施工予定地において江戸時代に属する遺跡が確認された。当該範囲は金沢城下町遺跡の一角にあたることから、遺跡名は「金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）」とした。

これを受け、平成30年（2018）6月8日にシオタニ株式会社と金沢市とで委託契約を交わし、発掘調査に着手することになった。発掘調査範囲は事業予定地のうち、工事によって遺構が破壊する範囲、計202㎡が対象となった。調査期間は平成30年7月13日～同年9月27日に実施した。

出土遺物等の屋内整理作業は令和元年度に行い、発掘調査報告書を編集・刊行した。



第1図 金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)の位置(S=1/10,000)

第2節 発掘調査の概要

有料老人ホーム建設予定地は浅野川によって形成された高低差のある河岸段丘上で、調査対象となったのは遺跡が確認された段丘の高い位置に建設が予定された駐車場部分と段丘の崖で破壊されるカ所、202㎡とした。

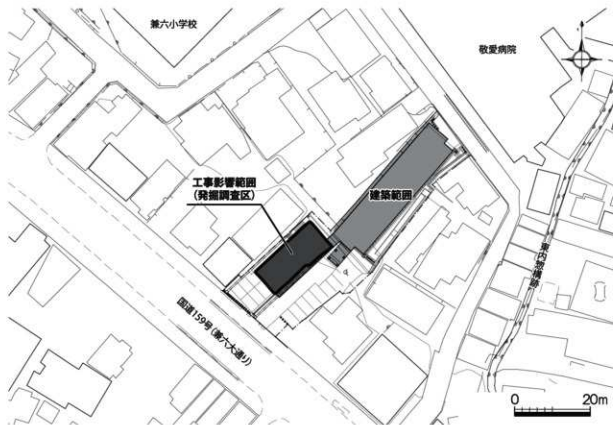
調査においては世界測地系 2011 に基づいた公共座標 (MK-WE 座標系第Ⅶ系) に準拠して調査区内に 10 m メッシュグリッド杭を設定した。グリッド杭に西から A～D、北から 1～6 の順で杭番号を設定して座標値の基準としている。遺物の取り上げや遺構の位置については、調査区が狭いことから地表面からの深さで行っている。

基本層序は現況の G L から約 70cm 程度が近世包含層であるが、大きく攪乱を受けていた。G L から 80cm では石垣や石製構造物、土坑などが確認されたが、調査区全体が近代の攪乱を受け破壊されていた。G L 100cm まで掘削すると、敷石や溝などが確認され、G L 120cm に達すると、これまで暗褐色を呈し遺物を含んでいたやや粘質のある土砂から、やや明るい褐色の砂礫を呈した遺物をほぼ含まない土砂へと変化した。

【発掘日誌抄】

平成 30 年 (2018 年)

7月13日	調査区範囲杭設置。	8月21日	遺構図作成。
7月17日	表土掘削(調査区西側半分、2日間)。	8月27日	石垣1検出。
7月19日	屋外作業員作業開始。包含層掘削。	8月30日	石列1検出。
7月24日	石組み検出	9月 5日	石垣等立面図作成。
7月30日	整地層掘削。	9月11日	土坑等掘削。
8月 6日	表土掘削(調査区東側半分、1日間)。	9月20日	遺構図作成、測量撮影準備。
8月 7日	東側包含層掘削。石組み検出。	9月21日	測量図化用写真撮影
8月 9日	西側遺構検出。掘削。	9月27日	撤収作業。現地作業終了。



第2図 発掘調査区位置図[S=1/1,000]

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

金沢城下町遺跡は、金沢城を中心とし惣構跡に圍繞された約200haの範囲に広がる近世に属する遺跡である。

石川県は日本海に面した県で、東は富山県、西は福井県、南は岐阜県と接している。旧国名では北の能登国と南の加賀国からなる、南北に細長い県である。

金沢市は旧加賀国の北部、石川県の中央やや南に位置する、面積468.64km²、人口約46万6千人を抱える石川県の県都である。江戸時代においては加賀藩前田氏の居城である金沢城の城下町として繁栄し、太平洋戦争時の戦災を免れた町並みは現在でも当時の姿をうかがわせている。旧市街地が古い都市構造を残すのに対し、JR金沢駅以北の扇状地においては、かつての水田や耕作地帯から区画整理事業による新興住宅地に姿を変え、また県庁移転や北陸新幹線開通などの影響によってビジネス街が発展するなど、旧市街地とは対照的な姿をみせている。

金沢市の地形は、東方は森本丘陵および加越山地で、そこから北西方向に平野部が広がり、北東から南西方向に伸びる海岸線の日本海に面している。平野部は南東に連なる奈良岳・奥三方・大門山など海拔1,500mを超える山地に源を発して西流する浅野川と犀川によって三分され、浅野川以北が北部平野、浅野川と犀川の間に西部平野、犀川以南が南部平野である。北部平野は浅野川や森下川などにより形成された沖積平野で、粘性の強い地盤である。南部平野は白山に源を発する石川県最大の河川、手取川が形成した扇状地の北辺にあたり、砂質の強いシルト層の地質である。西部平野は犀川・浅野川の沖積地で、北部平野と南部平野の地質が混在している。

城下町及び旧市街は犀川と浅野川が最接近する付近に形成された小立野段丘一帯に立地しており、本遺跡はその東側の下位段丘上に位置する。加賀藩三代藩主前田利常の頃に大きく整備された金沢城とその城下町は、もと一向宗の拠点の一つであった金沢御堂（尾山御坊）とその寺内町につくられたもので、17世紀前半にはほぼその姿を整えている。犀川・浅野川と河岸段丘より成る地形を巧みに利用したものとなっており、段丘突端に築かれた金沢城を中心に、段丘崖部にはその高低差を利用して「惣構」と称される土居・堀で形成された遺構が、旧市街地を取り囲むように内、外2重に巡らされている。金沢市は、旧市街地の地下に存在する近世城下町の遺跡を埋蔵文化財包蔵地として一体的に保護するため、外惣構内側の範囲及び金沢城東側の家臣団屋敷地について平成23年（2011）に「金沢城下町遺跡」として周知化した。この範囲は国重要文化的景観「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」の範囲に一致している。

本遺跡は金沢市の中心部、兼六元町地内にある。金沢城の東約300m、浅野川の西約400mの距離で、ほぼ両者の中間に位置する。調査地周辺は、金沢城をはじめ、兼六園、金沢21世紀美術館などの観光スポットが集結し賑わいをみせている。



第3図 石川県及び金沢市の位置

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

平成23年度に周知化された金沢城下町遺跡の範囲は、先述したとおり惣構の内部と金沢城東側の家臣団屋敷地である。周知を図るにあたって、この範囲に属する既存周知の遺跡については、中世以前のものについては変更せず、近世を主とする既存のものは「金沢城下町遺跡（【既存周知の遺跡名】地区）」、以降新発見の遺跡については「金沢城下町遺跡（【遺跡の存在する街区】地点）」と呼称を統一することとしている。以降、「地区」及び「地点」呼称のものは金沢城下町遺跡であることを示すものとしてご理解いただきたい。

周辺地域の最古の生活痕としては、金沢城石川門前土橋（a）および車橋調査区（b）の盛土層から旧石器時代後期の剥片石器がみつまっている。縄文時代の代表的な遺跡としては、縄文時代前期末～後期にかけての集落跡である笠舞A遺跡、晩期の鹿角製釣針が出土した笠舞B遺跡、犀川の第一段丘面に形成された後・晩期の集落跡と想定される犀川鉄橋遺跡などがある。

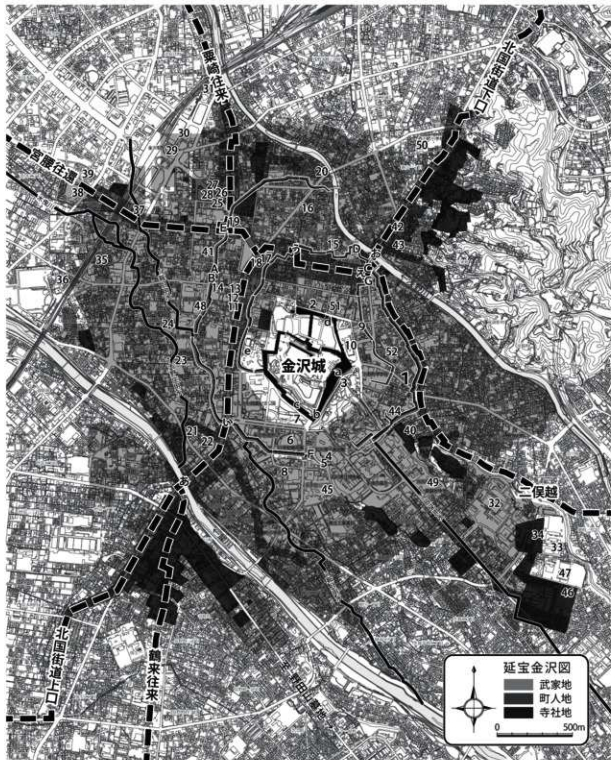
弥生時代の遺跡としては、前田氏（長種系）屋敷跡地区（2）がある。弥生時代後期後半から終末期の墳丘墓が検出され、中心部に1基、その周りに4基の木棺が検出されている。本町一丁目遺跡（25～28）からは終末期の集落跡が検出された。広坂遺跡（6・7）、高岡町地点（13・14）、醒ヶ井町遺跡（39）でも弥生時代後期～古墳時代前期の遺構がみつまっているほか、当遺跡においても古墳時代前期に属する溝が検出されている。古墳時代末の遺跡としては、高岡町地点があり、日本に伝来しなかったとされる半瓦当が出土したほか、奈良二彩や銅製帯金具が出土するなど特異な性格をもつ遺跡である。

奈良・平安時代では、金沢21世紀美術館建設に伴い発掘調査を実施した広坂遺跡で藤原宮式軒平瓦と平城宮式軒瓦が出土し、古代寺院の存在が想定されている。前田氏（長種系）屋敷跡地区からは土坑や小穴が検出され、当該期の土器が出土している。

中世には高岡町地点で薬研堀が検出されたほか、彦三町一丁目15番地点（16）でも溝と遺物が報告されている。戦国時代になると現在の金沢城の場所に金沢御堂が建てられ周囲には寺内町があったと考えられているが、遺構が検出されていないため詳細は不明である。

近世では、金沢城跡が平成20年（2008）に国史跡に指定され、以後発掘調査成果を基に五十間長屋・橋爪門・河北門や玉泉院九庭園などが復元・整備されている。金沢城下の範囲を規定する惣構跡は慶長4年（1599）に内惣構が造られ、次いで外惣構が整備されている。現在、土居は盛土のほとんどを消失し、堀も規模を縮小して水路として機能するのみだが、金沢市では惣構跡の確認調査を断続的に行っており、復元された線形は市指定史跡として保護され、東内惣構跡枯木橋北地点（C）、同南地点（G）、西内惣構跡主計町地点（D）、西外惣構跡升形地点（E）の復元整備が実施されている。

当遺跡周辺では多くの近世遺跡の発掘調査が実施されている。前田氏（長種系）屋敷跡地区（2）では当該期の井戸、土坑の他、それ以前の屋敷地、井戸などが確認された。長氏屋敷跡地区（48）では確認調査が行われ、17世紀前半の整地層が見つかった。本多氏の下屋敷である本多町三丁目地点（45）の調査では、屋敷地及び道路跡、辰巳用水の分流などが確認されている。2011年に発掘調査が行われた兼六元町7番地点（52）では石高150～500クラスの武家地跡を調査し、区画溝や石列を確認している。この調査で見つかった井戸の枠は船の底板を分割して利用しており、近世の船の構造を知る上で重要な発見となった。広坂遺跡、丸の内7番地点（10）では、礎石建物、井戸、土塀の基礎など上級武士の屋敷地及び道路跡が検出されている。



第4図 城下町復元図と調査された遺跡(S=1/25,000)

- 1.兼六元町15番地点 2.前田氏(長種系)屋敷跡地区 3.兼六園江戸町推定地点 4-5.本多氏屋敷跡地区 6-7.広坂道跡
 8.下本多町地点 9.兼六元町3番地点 10.丸の内7番地点 11.高岡町一ツ水溜跡地点 12.高岡町3番地点 13-14.高岡町地点
 15.彦三町一丁目8番地点 16.彦三町一丁目15番地点 17.青草町地点 18.下堤町地点 19.安江町地点 20.瓢箪町道跡
 21.片町二丁目道跡(13番地点) 22.片町二丁目道跡(5番地点) 23.長町道跡 24.穴水町道跡 25-28.本町一丁目道跡
 29.木ノ新保道跡(7番丁地点) 30.木ノ新保道跡(安江町地点) 31.久昌寺道跡 32-33.宝町道跡 34.経王寺道跡
 35.三社町道跡 36.元菊町道跡 37.昭和町道跡 38.長田町道跡 39.麴ヶ井町道跡 40.東兼六町5番地区 41.玉川町道跡
 42.東山一丁目道跡(3番地点) 43.東山南水溜跡 44.東兼六地点 45.本多町三丁目地点 46.小立野四丁目道跡
 47.小立野ユミノマチ道跡 48.長氏屋敷跡地区 49.飛梅町3番地点 50.森山二丁目道跡 51.大手町3番地点 52.兼六元町7番地点
 A. B.西外惣構跡武蔵町地点 C.東内惣構跡枯木橋北地点 D.西内惣構跡主計町地点 E.西外惣構跡形形地点
 F.西外惣構跡本多町三丁目地点 G.東内惣構跡枯木橋南地点 ……以上、地区・地点呼称分は金沢城下町道跡
 a.金沢城跡(石川門上土橋) b.金沢城跡(車橋) c.金沢城跡(宮守堀) d.金沢城跡(新丸) e.金沢城跡(金谷出丸)
 あ.犀川大橋 い.香林坊橋 う.袋町橋 え.枯木橋 お.浅野川大橋



第5図 遺構全体図(S=1/100)写真

第3章 遺構と遺物

調査区は調査直前まで駐車場として利用されていたが、それ以前は民家が建っていたと思われる。表土掘削の際に浄化槽やコンクリート基礎、塩ビパイプなどが残っていた。

SK01 (第5・7・9図) 調査区北東で検出し一部は壁にかかっていたため平面形は不明である。規模は短径(70)cm、長径120cm、深さ67cmである。出土遺物は第9図1、肥前産陶器小坏である。17世紀前半代のものである。第9図2は産地不明の陶器土瓶の底部で、外面底部に足が1個残存している。18世紀後半以降のものか。第9図3は在地産土師器灯明皿である。灯芯油痕が残る。17世紀後半のものか。SK01は概ね18世紀後半以降に埋められた土坑と考えられる。

SK02 (第5・7図) 調査区中央東寄りで検出された。平面形は不整形で、規模は短径50cm、長径170cm、深さ70cmである。出土遺物は無い。

SK03 (第5・7・9図) 調査区中央南東より出検出された土坑で、平面形は楕円形を呈する。規模は短径59cm、長径150cm、深さ32cmを計る。出土遺物は第9図4のいぶし平瓦片である。

SK04 (第5・7図) 調査区南端で検出された。平面形は調査区にかかるため不明である。規模は検出できた短径が42cm、長径90cm、深さ14cmである。SD02に切られる。出土遺物は無い。

SK05 (第5・7・9図) 調査区南端で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は短径68cm、長径95cm、深さ60cmを計る。SD02に切られる。出土遺物は第9図5で在地産土師器灯明皿である。灯芯油痕が確認できる。17世紀前半のものである。

SK06 (第5・7図) 調査区南西中央よりで検出された土坑で、平面形は円形を呈する。規模は短径50cm、長径57cm、深さ87cmを計る。出土遺物は無い。

SK07 (第5・7・9図) 調査区南西で検出された土坑で、平面形は楕円形である。規模は短径59cm、長径70cm、深さ50cmを計る。SK08を切る。出土遺物は第9図6、須恵器の壘片で外面に敲き痕、内面に当具痕が見られる。第9図7は在地産土師器灯明皿である。時期は不明。

SK08 (第5・7図) 調査区南西で検出された土坑で、平面形は円形、規模は短径60cm、遺存していた長径は60cm、深さ35cmで底から礎石が検出された。SK07に切られる。SK04とSK06とSK08は一直線上に並び、柱間距離は約2.3mであることから建物の一部である可能性が高い。出土遺物は無い。

SD01 (第5・7図) 調査区南西端で検出された溝で、北-南方向に流れる。規模は遺存していた幅は105cm、深さ18cmである。

SD02 (第5・7図) 調査区南側で検出された溝で、北東-南西方向に流れる。規模は幅60cm、深さ46cmである。出土遺物は無い。

SD03 (第5・9図) 調査区西側で検出された溝で、北東-南西方向に流れる。規模は幅30cm、深さ5cmである。出土遺物は第9図8は瀬戸美濃産陶器鬘盥である。第9図9は在地産土師器灯明皿である。口縁部に灯芯油痕が見られる。17世紀後半のものである。第9図10はいぶし瓦の平瓦片である。

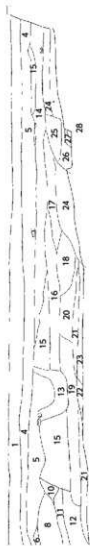
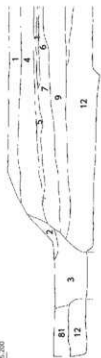
石垣1-1 (第5・8・9図) 調査区北側で検出された石垣で、北西-南東方向である。規模は検出されただけで長さ485cm、幅約90cm、2段目まで残存していた。出土遺物は石垣を断ち割った際に確認している。第9図11は肥前産陶器のすり鉢で17世紀中頃に作られたものである。

石垣1-2 (第5・8図) 調査区北側で検出された石垣で石垣1-1から南西方向にほぼ直角に続く。北東-南西方向で、規模は長さ448cm残存し、幅は約70cm、1段目が大部分を占めるが、一部2段残存しているか所が残る。出土遺物は確認できなかった。

石垣2 (第5・8図) 調査区中央北寄りで検出された石垣で一部分しか残っていない。北東-南

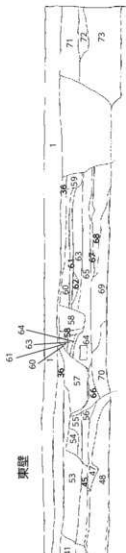
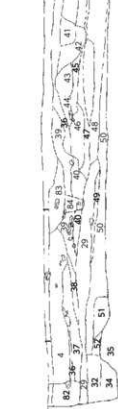
西壁

1/25,200



東壁

1/25,200



南壁

1/25,200



北壁

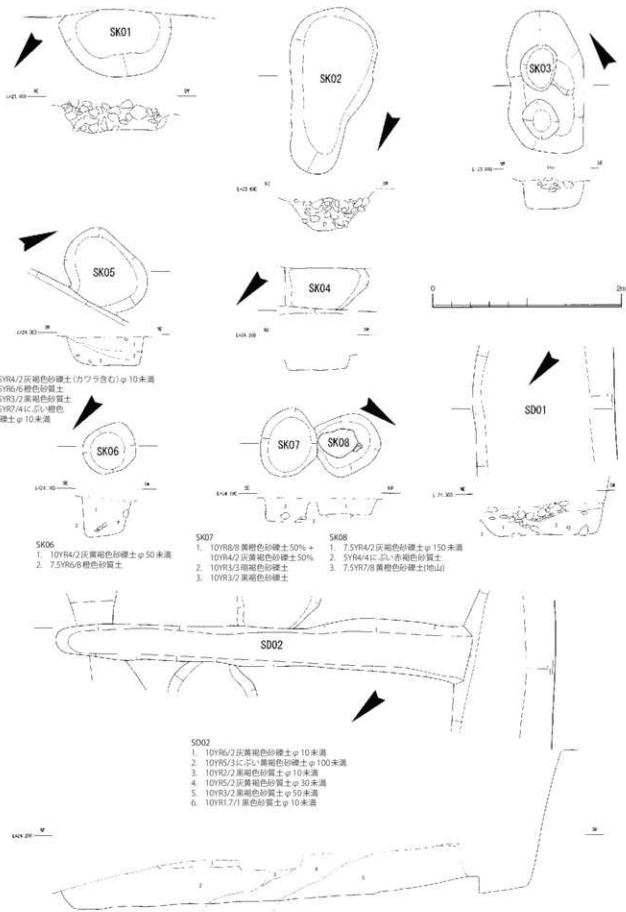
1/25,200



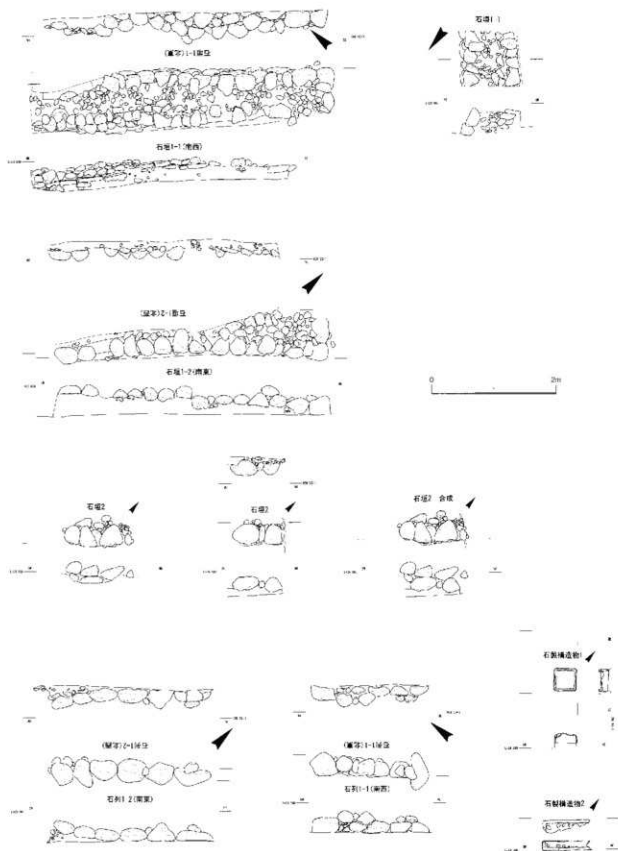
第6圖 調査区壁断面(S=1/80)

調査区壁土色

1. 砂石
2. 75R3/7 黄褐色顔料土 5.0% + 10R8/8 黄褐色顔料土 5.0%
3. 10R2/2 黄褐色顔料土 φ 300 ~ 大石
4. 10R2/2 黄褐色顔料土 φ 100 ~ 中石
5. 10R1/1 黄褐色顔料土 (17ヶ丸) 替ヶ不泥 コシガ少泥
6. 10R8/8 黄褐色顔料土 (一部磁器土) + 75R5/4 に近い褐色顔料土 大入
7. 10R3/1 黄褐色顔料土 φ 100 ~ 中石
8. 10R4/3 に近い黄褐色 (磁器土)
9. 10R5/5 黄褐色顔料土 (17ヶ丸)
10. 75R5/4 に近い褐色顔料土 (17ヶ丸) 辻付底泥 + 磁器土
11. 75R5/4 に近い褐色顔料土
12. 10R3/2 黄褐色顔料土 (17ヶ丸) φ 300 ~ 大石
13. 10R4/3 に近い黄褐色 (17ヶ丸) φ 100 ~ 中石
14. 10R4/3 に近い黄褐色 (磁器土)
15. 10R4/3 に近い黄褐色 (磁器土)
16. 75R4/2 黄褐色顔料土 φ 150 ~ 中石
17. 75R4/2 黄褐色顔料土 φ 100 ~ 中石
18. 10R4/3 に近い黄褐色 (17ヶ丸)
19. 75R5/4 に近い褐色顔料土 (100未満)
20. 75R5/4 に近い褐色顔料土 (磁器土)
21. 10R2/3 黄褐色顔料土 (土層より取り磁器少)
22. 25R4/2 黄褐色顔料土
23. 25R4/2 黄褐色顔料土
24. 10R5/5 黄褐色顔料土 (磁器少)
25. 10R5/5 黄褐色顔料土 (磁器少)
26. 75R2/1 黄褐色顔料土 (山崎)
27. 25R3/2 黄褐色顔料土
28. 75R3/1 オリーブ黄褐色顔料土
29. 10R5/5 黄褐色顔料土 φ 300 ~ 大石
30. 10R5/5 黄褐色顔料土 φ 100 ~ 中石
31. 25R7/4 黄褐色顔料土 (SC02)
32. 10R4/2 黄褐色顔料土 φ 50 ~ 中石
33. 10R4/6 黄褐色顔料土
34. 10R5/5 黄褐色顔料土 φ 50 ~ 中石
35. 10R2/2 黄褐色顔料土 φ 300Over
36. 75R2/1 黄褐色顔料土 (コンガ少)
37. 10R5/5 に近い黄褐色顔料土 φ 30 ~ 中石
38. 10R6/1 黄褐色顔料土 (磁器土)
39. 10R5/5 黄褐色顔料土 (コンガ少)
40. 10R2/1 黄褐色顔料土 (レンガ)
41. 10R2/1 黄褐色顔料土 (レンガ)
42. 10R5/6 黄褐色顔料土 (レンガ)
43. 75R5/2 黄褐色顔料土 (黄褐色顔料ブロック含む)
44. 10R8/8 黄褐色顔料土 (17ヶ丸) φ 250 ~ 大石
45. 10R5/3 に近い黄褐色顔料土
46. 10R4/3 に近い黄褐色顔料土 (磁器土)
47. 10R4/2 黄褐色顔料土 (磁器土)
48. 75R5/3 に近い黄褐色顔料土 φ 50 ~ 中石
49. 75R5/2 黄褐色顔料土 φ 100 ~ 中石
50. 75R5/2 黄褐色顔料土 φ 300over
51. 75R6/1 黄褐色顔料土 φ 300over
52. 75R5/2 黄褐色顔料土 (17ヶ丸)
53. 25R2/1 黄褐色顔料土 (17ヶ丸)
54. 75R5/8 黄褐色顔料土
55. 10R7/4 に近い黄褐色顔料土
56. 75R3/1 黄褐色顔料土 (磁器土)
57. 75R5/3 に近い黄褐色顔料土 (磁器土)
58. 75R5/3 に近い黄褐色顔料土 (17ヶ丸) 磁器土 (58 巻頭)
59. 10R4/2 黄褐色顔料土 (磁器土)
60. 75R7/6 黄褐色顔料土
61. 75R7/6 黄褐色顔料土
62. 25R2/1 黄褐色顔料土
63. 10R7/4 に近い黄褐色顔料土
64. 75R7/1 黄褐色顔料土
65. 10R6/3 に近い黄褐色顔料土 (磁器 + 近型) + 10R4/1 黄褐色
66. 10R5/3 黄褐色顔料土 (磁器)
67. 10R3/1 黄褐色顔料土 (磁器)
68. 10R3/1 黄褐色顔料土 (磁器)
69. 10R6/3 に近い黄褐色顔料土 (磁器土)
70. 10R5/2 黄褐色顔料土
71. 10R5/2 黄褐色顔料土 (磁器)
72. 10R5/2 黄褐色顔料土
73. 10R5/8 黄褐色顔料土 φ 300 ~ 大石
74. 10R8/8 黄褐色顔料土 5.0% + 10R5/1 黄褐色 5.0%
75. 10R2/1 黄褐色 φ 150 ~ 中石
76. 10R2/1 黄褐色顔料土 (φ 250 未満)
77. 10R2/1 黄褐色顔料土 φ 100 ~ 中石
78. 25R2/1 黄褐色顔料土
79. 10R3/1 黄褐色 φ 250 ~
80. 25R2/2 黄褐色 (磁器土)
81. 75R2/2 黄褐色顔料土 (コンガ少) 丸石
82. 75R2/2 黄褐色顔料土 (コンガ少) 丸石
83. 10R5/3 に近い黄褐色顔料土 (17ヶ丸) 砂石
84. 75R4/1 黄褐色顔料土 (コンガ少)
85. 75R4/1 黄褐色顔料土



第7図 遺構平・断面図(S=1/40)



第8圖 遺構平·立面(S=1/60)

西方向で規模は、残存していた長さが110cm、幅約48cmである。1段目までしか残っていなかった。出土遺物は無い。

石列 1—1 (第5・8図) 石垣1—2のすぐ南東隣で確認された石列である。北西—南東方向で、規模は長さ270cm、幅約36cm、1段目まで残存していた。出土遺物は確認できなかった。

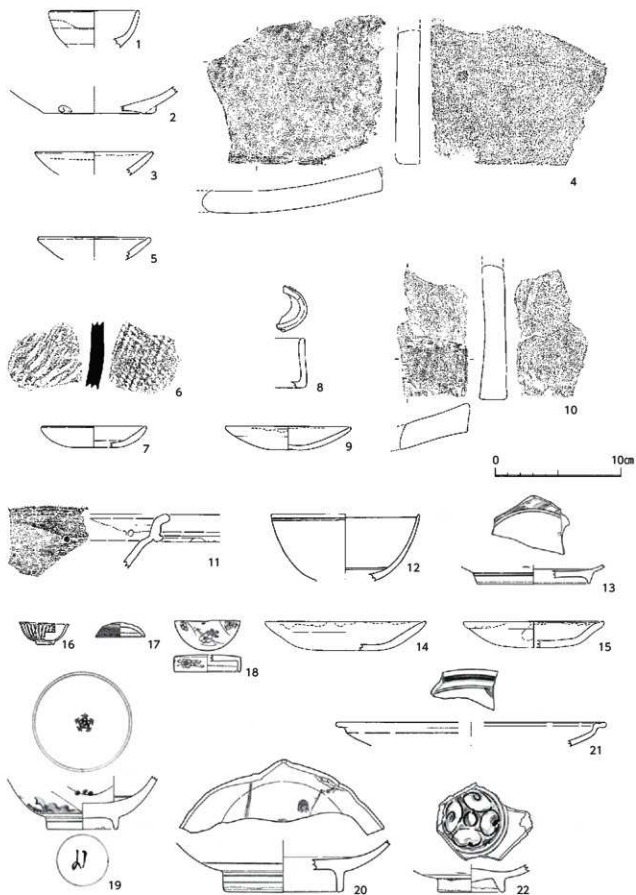
石列 1—2 (第5・8図) 石列1—1—南西報告にはほぼ直角に続く。北東—南西方向で、規模は長さ270cm、幅約40cmで、1段目まで残存していた。出土遺物は確認できなかった。

石製構造物1 (第5・8・13図) 第13図1は風炉の炉石である。全面に加工時のノミ跡が残存している。

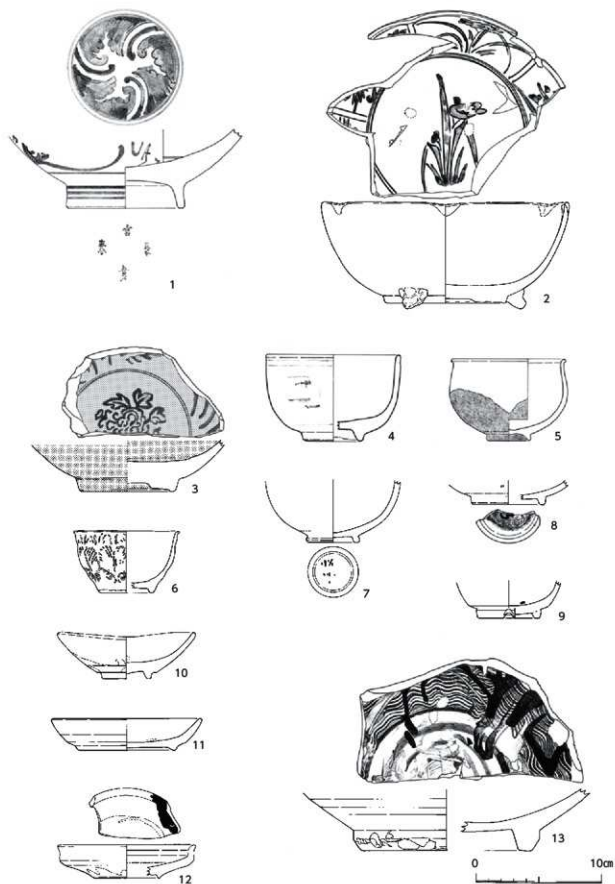
石製構造物2 (第5・8図) 洗い場の流し台の一部か。

整地層 (第9図) 第9図12は肥前産磁器碗である。17世紀後半～18世紀前半に作られたものである。第9図13は肥前産磁器皿で17世紀中頃～17世紀後半のものである。第9図14は在地産土師器灯明皿で口縁部に灯芯油痕が残る。17世紀中頃のものか。第9図15は在地産土師器皿で口縁が外反し、灯芯油痕が残る。17世紀後半のものである。

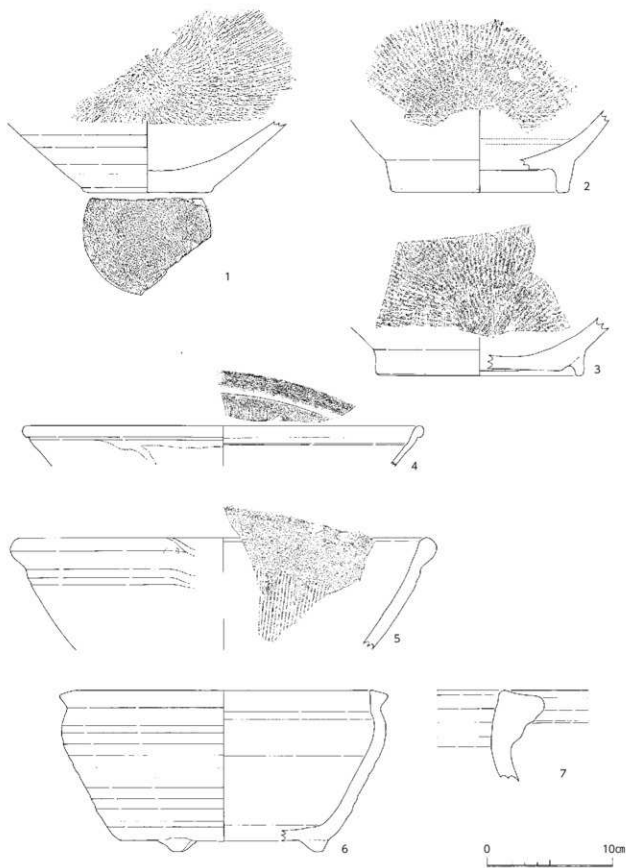
包含層 (第9～14図) 第9図16は肥前産磁器紅皿である。型押し成形で外面は貝殻状で白磁のものである。第9図17・18は肥前産磁器合子蓋で17は型押し成形である。18は色絵が施されている。第9図19は肥前産磁器碗で見込みにコンニャク印判の五弁花文がある。高台内には銘が描かれている。17世紀末のものか。第9図20は肥前産磁器鉢である。17世紀後半のものか。第9図21は肥前産磁器皿で口縁が折り縁状になっている。焼成不良か胎土が赤っぽくなっている。17世紀前半のものであろう。第9図22は中国産漳州窯の磁器碗である。第10図1は肥前産磁器鉢で高台内に「富貴長春」の銘が描かれている。この銘は18世紀代に長く用いられる。第10図2は肥前産磁器鉢で内面に芙蓉手風文様が描かれている。高台は蛇目凹形高台で、鉄錆が塗布されている。三足になると思われるが2個だけ足が残存している。17世紀後半～18世紀後半のものであろう。第10図3は肥前産磁器鉢で青磁釉が施されている。波佐見地方で製作されたもので内面は型打ち成形で除刻が見られる。高台は蛇目凹形高台となっている。17世紀後半のものである。第10図4は肥前産陶器碗で鉄絵が描かれている。17世紀末～18世紀前半のものである。第10図5は京・信楽産の陶器碗で鉄釉と透明釉が掛け分けられている。第10図6は産地不明の陶器碗である。口縁部は外反し、鉄釉が掛けられている。外面が型打ち成形で細かな草花文様が施されている。第10図7は京・信楽産の陶器碗で高台内に判読不明の墨書が残る。第10図8は京・信楽産の陶器碗で高台内に「岩倉」の刻印が見られる。第10図9は産地不明の陶器碗で高台が割高台となっている。第10図10は肥前産陶器皿で見込み及び外面底部に胎土目跡が各4個残存している。16世紀末～17世紀初頭のものである。第10図11は美濃産陶器皿で長石釉が施されている。内外面に円錐ビンの跡が各2個ずつ残存している。第10図12は越中瀬戸産陶器皿で鉄釉が施され一部に灰釉が掛けられている。体部から口縁部に掛けて立ち上がり、口縁部はやや外反する。見込みは釉が拭き取られているが、拭き取りきれなかった部分に重ね積みで焼いた別の皿の高台跡が残存している。第10図13は肥前産陶器鉢で刷毛目拂書き文が施されている。内面に砂胎土目跡が2個残存している。高台外面は面取りされている。18世紀代のものである。第11図1～4は肥前産陶器すり鉢である。1はロクロ成形され底部に糸切り痕が残る。17世紀後半のものである。2もロクロ成形で見込みに輪状の砂目跡が残る。内面はマメツしている。18世紀代のものである。3は敲き成形のもので、外面底部に砂胎土目跡が2個残存している。内面はマメツしている。18世紀代のものである。4はロクロ成形のもので17世紀後半のものである。第11図5は産地不明の陶器すり鉢である。第11図6は越前産陶器鉢で三足が付く。外面には鉄泥が施されている。19世紀代のものである。第11図7は越前産陶器甕で鉄泥が施されている。18世紀末～19世紀代のものであろう。



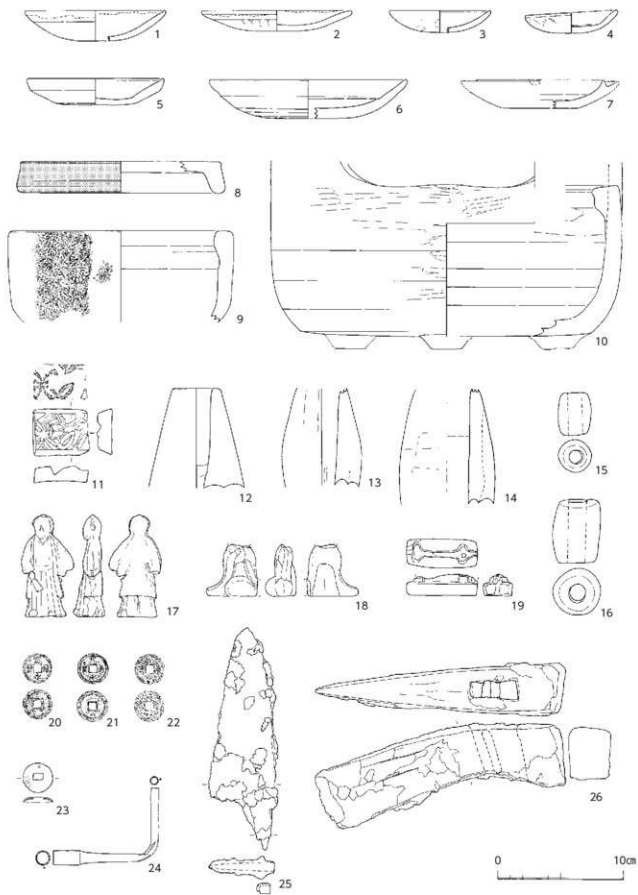
第9回 SK01(1~3)、SK03(4)、SK05(5)、SK07(6・7)、SD03(8~10)、整地層(11~15)、包含層(16~22)
 出土遺物実測図(S=1/3)



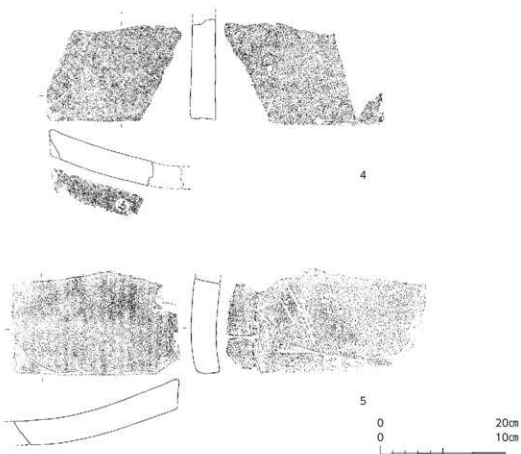
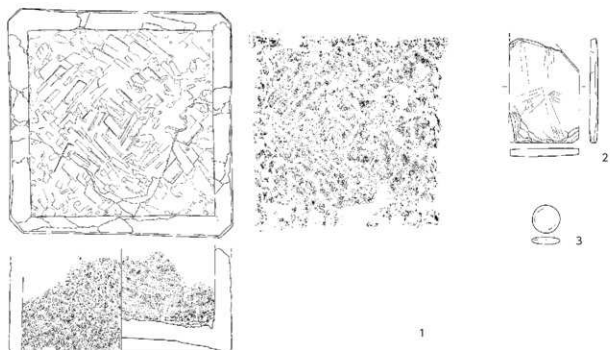
第10图 包含层出土遗物实测图(S=1/3)



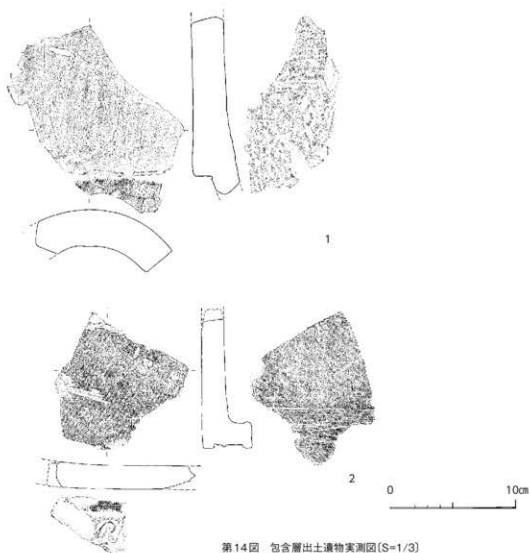
第11图 包含層出土遺物実測図(S=1/3)



第12图 包含層出土遺物実測図(S=1/3)



第13図 包含層出土遺物実測図(1:S=1/6、2~5:S=1/3)



第14図 包含層出土遺物実測図(S=1/3)

第12図1～4、6は在地産土師器灯明皿である。1は端部が軽く内側に折れる。17世紀末のものである。2は端部が外反し、外面に指頭圧痕が残る。高さは低い。17世紀後半のものか。3は小ぶりのもので底部が丸い。体部から口縁部に掛けても緩やかに内湾する。17世紀後半のものか。4も小ぶりのものであるが、型打ち成形のものである。18世紀末～19世紀初頭のものである。6はロク口成形のもので、外面口縁部がナデ、体部がケズリ成形されている。近代のものか。5は産地不明の土師器灯明皿で胎土は白っぽくきれいである。口縁部は強いナデ成形で立ち上がる。第12図7は在地産土師器灯明受け皿である。17世紀後半～17世紀末のものか。第12図8は在地産土師器火消し壺の蓋である。外面に赤色顔料が塗布されている。第12図9は在地産土師器火鉢で外面に赤漆、口縁部に黒漆が塗布されている。外面には印花が押印されている。第12図10は在地産土師器坩堝で窓部分に煤が付着している。三足中1個だけ足が残存している。第12図11は在地産土師器七輪の体部にある窓部分の蓋で、外面には七宝と紅葉の刻印が見られる。第12図12～14は在地産土師器焼壺である。第12図15・16は在地産の土鍾である。第12図17～19は在地産土人形である。17は男性立像、18は女性座像、19は人形等の台座部分である。第12図20～22は寛永通宝である。20は古寛永、21と22は新寛永である。第12図23は銅製の飾り金具である。第12図24は銅製の煙管の吸い口である。第12図25は鉄製の包丁である。第12図26は鉄製の割斧でクサビが残存している。第13図2は砥石である。第13図3は黒い基石で、包含層から同じ黒い基石が他に3点出土している。第13図4・5はいぶし瓦の平瓦片である。4は刻印が1個押されている。第14図1はいぶし瓦の丸瓦である。内面には刺縫痕とコビキB技法による粘土切り離し痕が残る。第14図2はいぶし瓦の軒平瓦で軒の見える部分に文様が見られる。

第1表 出土遺物観察表

単位 (mm)

図版 番号	番号	調査 区	遺構	器種 種別	分量			遺存 /12	軸裳 輪付	胎土色調		産地	備考	実測 番号	
					a	b	c			外面	内面				
					d										
第9図	1		SK01	小坏 陶器	72	-	(30)	-	口2	灰軸	10YR6/1 褐灰	肥前		M3	
	2		SK01	土鍋小 陶器	-	80	(22)	-	底2	鉄軸	10YR8/3 浅黄橙	不明	外面底部に足1個残	M2	
	3		SK01	土師器 血 土器	94	-	(18)	-	口2		10YR8/3 浅黄橙	在地	灯芯油痕2/12以上	M4	
	5	SLU 70	SK05	土師器 血 土器	90	-	(18)	-	口1		10YR8/3 浅黄橙	在地	灯芯油痕1カ所以上	M6	
	6	GLU 70	SK07	要 須石器	-	-	(54)	-	破片	灰軸	N6 灰		外面敲痕、内面当具痕	M7	
	7	GLU 70	SK07	土師器 血 土器	84 内49	17	-	-	口1		10YR8/3 浅黄橙	在地		M8	
	8	BLU 140	SD03	甕 陶器	-	-	40	-		灰軸	2.5Y8/1 灰白	瀬戸 美濃		M9	
	9	GLU 140	SD03	土師器 血 土器	100 内30	19	-	-	口1		7.5YR8/4 浅黄橙	在地	灯芯油痕1/12以上	M11	
	11	石垣 断割		すり鉢 陶器	276	-	(43)	-	口1 以下	鉄軸	7.5YR6/3 にぶい褐	肥前	口縁部に溶着痕有	Q17	
	12	GLU 140		碗 磁器	118	-	(53)	-	口1	透明軸 染付	N9 白	肥前		Q25	
	13	GLU 140		皿 磁器	-	15	-	-	底2	透明軸 染付	N9 白	肥前	高台内1重圈線	Q26	
	14	GLU 140		土師器 血 土器	112 内66	21	-	-	口3		5YR7/6 橙	在地	灯芯油痕2/12以上 指頭圧痕 胎土に赤色粒少量混	Q28	
	15	GLU 140		土師器 血 土器	128 内68	23	-	-	口2		10R8/3 浅黄橙	在地	灯芯油痕1/12以上	Q27	
	16	GLU 70- 120		紅皿 磁器	39 15	18	-	-	口11 底12	透明軸	N9 白	肥前	型押成形	Q3	
	17	GLU 70- 120		合子蓋 磁器	39 ツミ-	12	-	-	口11	透明軸 染付	N9 白	肥前	型押成形	Q4	
	18	GLU 70- 120		合子蓋 磁器	52 ツミ-	14 53	-	-	口4	透明軸 色絵	N9 白	肥前	色絵(赤・緑・黒)	Q5	
	19	GLU 70		碗 磁器	-	56	-	(43)	底9	透明軸 染付	N9 白	肥前	見込みコンニャク印判五弁花 高台内1重圈線、銘有	M12	
	20	GLU 70- 120		鉢 磁器	-	95	-	(41)	底3	透明軸 染付	N9 白	肥前	高台内1重圈線	Q7	
	21	GLU 70- 120		皿 磁器	216	-	(19)	-	口1 以下	透明軸 染付	10YR8/1 灰白	肥前		Q6	
	22	GLU 70- 120		碗 磁器	-	53	-	(22)	底5	透明軸 白泥 染付	10YR8/3 浅黄橙	中国	漳州窯 高台砂付着	Q10	
	第10図	1	GLU 70		鉢 磁器	-	94	-	(63)	底12	透明軸 染付	N9 白	肥前	貫入有 高台内銘「富貴長春」 六弁花 蛇目凹形高台	M1
		2	GLU 70- 120		鉢 磁器	197	87	-	(94)	口4 底9	透明軸 染付	N9 白	肥前	見込に胎土目3 残 足3個中2個残	Q9
3		GLU 70- 120		鉢 磁器	-	77	-	(41)	底6	青磁軸	N8 白	肥前	蛇目凹形高台 内面型打 除刺	Q8	
4		GLU 70- 120		碗 陶器	107 48	65	-	(8)	口8 底8	透明軸 鉄軸	N7 灰白	肥前	畳付無軸 施釉部分貫入	Q2	
5		GLU 70- 120		碗 陶器	90 36	65 94	-	(12)	口1 底12	透明軸 鉄軸	2.5Y8/2 灰白	京・信		Q1	
6		GLU 70- 120		碗 陶器	84 43	49	-	(5)	口3 底5	鉄軸	2.5Y7/1 灰白	不明	型押成形 口縁部八角形 口縁の一部に焼成前の欠け 有	Q11	

第1表 出土遺物観察表

単位 (mm)

図版 番号	番号	調査 区	遺構	器種 種別	法量			遺存 /12	釉薬 輪付	胎土色調		産地	備考	実測 番号
					a	b	c			外面	内面			
第10図	7	GLU 70	包含層	碗 陶器	-	42	(50) -	底 12	透明釉 白化粧土	10YR8/2 灰白	京・信	高台内墨書有	M19	
	8	GLU 70	包含層	碗 陶器	-	59	(19.5) -	底 4	透明釉 色絵	2.5Y8/3 淡黄	京・信	色絵(緑) 高台内墨書有 高台内刻印「岩倉」	M23	
	9	GLU 70	包含層	碗 陶器	-	50	(30) -	底 6	灰釉 鉄軸	N8 灰白	不明	割高台1ヵ所残 見込みに鉄軸	M14	
	10	GLU 70	包含層	皿 陶器	110 39	37 -	-	口 6 底 12	灰釉	N8 灰白	肥前	見込み及び外面底部に胎土 目各4個 壺み大	M13	
	11	GLU 70	包含層	皿 陶器	120 78	25 -	-	口 2 底 7	長石釉	10YR8/3 淡黄橙	美濃	高台内無釉 見込み及び高台内に円錐ピ ン痕2ヵ所すず残	M16	
	12	GLU 70	包含層	皿 陶器	110 53	27 -	-	口 3 底 3	灰釉 鉄軸	N8 灰白	越中瀬 戸	見込み軸拭き取り 見込み重ね積み	M15	
	13	GLU 70- 120	包含層	鉢 陶器	-	137	(49) -	底 5	鉄軸 白泥 刷毛目 柳書	10R5/4 赤褐	肥前	内面砂胎土目跡2個残	Q12	
	第11図	1	GLU 70- 120	包含層	すり鉢 陶器	-	102	(57) -	底 4	鉄軸	2.5YR5/1 赤灰	肥前	ロクロ成形 底部糸切 底部目跡4個残	M42
		2	GLU 70- 120	包含層	すり鉢 陶器	-	142	(65) -	底 1	鉄軸	10R5/6 赤	肥前	ロクロ成形 見込み軸状砂目跡 内面マメツ	M41
		3	GLU 70- 120	包含層	すり鉢 陶器	-	164	(46) -	底 5	鉄軸	10YR6/8 赤橙	肥前	敲き成形 胎土練りこみ有 内面マメツ 高台内砂目跡2個残	M38
		4	GLU 70- 120	包含層	すり鉢 陶器	320 -	(32) -	-	口 1	鉄軸	5YR4/1 褐灰	肥前	ロクロ成形 口縁部に鉄軸	M40
		5	GLU 70- 120	包含層	すり鉢 陶器	340 -	(89) -	-	口 1	鉄軸	2.5YR6/4 にぶい橙	不明		M39
		6	GLU 70- 120	包含層	鉢 陶器	262 164	128 -	-	口 1 底 3	鉄泥	10YR8/4 淡黄橙	越前	3足	M35
7		GLU 70	包含層	壺 陶器	(810) -	(74) -	以下	口 1	鉄泥	5YR6/6 赤橙	越前		Q18	
第12図	1	GLU 70	包含層	土師器 土器	112 内 30	24 -	-	口 3	鉄軸	5YR5/4 淡橙	在地	灯芯油痕 3/12 以上	Q14	
	2	GLU 70- 120	包含層	土師器 土器	120 内 60	16 -	-	口 2	鉄軸	7.5YR7/4 にぶい橙	在地	灯芯油痕 2/12 以上 外面指頭圧痕有	M34	
	3	GLU 70- 120	包含層	土師器 土器	81 内 39	18 -	-	口 4	鉄軸	7.5YR7/6 橙	在地	外面指頭圧痕点在	M33	
	4	GLU 70- 120	包含層	土師器 土器	74 内 44	19 -	-	口 10	鉄軸	7.5YR8/6 淡黄橙	在地	型打成形 外面掌痕有	M32	
	5	GLU 70	包含層	土師器 土器	109 内 58	21 -	-	口 1 以下	鉄軸	10YR8/3 淡黄橙	不明		Q15	
	6	GLU 70	包含層	土師器 土器	158 内 111	31 -	-	口 2	鉄軸	10YR7/3 にぶい黄橙	在地	ロクロ成形 底部回転へう刷り 見込みに凹線1条	Q13	
	7	GLU 70- 120	包含層	灯明受 土器	(126) 60	23 受径 100	-	底 4	鉄軸	7.5YR7/4 にぶい橙	在地	内面赤漆 灯芯油痕1ヵ所以上	M31	
	8	GLU 70- 120	包含層	火消壺 蓋 土器	164 160	25 -	-	口 1	鉄軸	7.5YR8/3 淡黄橙	在地	外面赤色顔料塗布	M30	
	9	GLU 70- 120	包含層	火鉢 土器	176 -	(73) 胴 180	-	口 2	鉄軸	7.5YR8/4 淡黄橙	在地	外面赤漆 口縁部黒漆 外面印花 内面煤付着	M26	
	10	GLU 70- 120	包含層	煤炉 土器	-	(149) 胴 280	-	底 1	鉄軸	5YR7/6 橙	在地	窓部分に煤付着 足3個中1個残	M27	
	11	GLU 70	包含層	七輪の 蓋 土製品	43 36	12 -	-	-	鉄軸	2.5Y6/8 橙	在地	七宝と紅葉の刻印	M24	
	12	GLU 70	包含層	焼塩壺 土器	38 -	(81) -	-	口 6	鉄軸	7.5YR8/4 淡黄橙	在地	破損した後被熱か	Q16	

第1表 出土遺物観察表

図版番号	番号	調査区	遺構	器種 種別	法量			遺存 /12	軸索 輪付	胎土色調		産地	備考	実測 番号
					a b	c d				外面	内面			
第12図	13	GLU 70- 120	包含層	焼塩壺 土器	(40) -	(78) 開64		開3		10YR8/3 浅黄橙		在地	雲母やや多い	M29
	14	GLU 70- 120	包含層	焼塩壺 土器	50 -	(92) 開76		口1		5YR7/6 橙		在地	雲母多い	M28
	15	GLU 70	包含層	土鉢 土製品	27 11	34		完形		2.5YR6/8 橙		在地		M18
	16	GLU 70	包含層	土鉢 土製品	28 14	51 -		完形		5YR8/3 淡橙		在地		M17
	17	GLU 70	包含層	土人形 土製品	82 42	25 -				5YR7/4 にぶい橙		在地	男性立像 中実 型合せ 孔1カ所 40g	M21
	18	GLU 70	包含層	土人形 土製品	(41) (41)	25 -				10YR8/3 浅黄橙		在地	女性座像 中実 型合せ 穴1カ所 22.9g	M20
19	GLU 70	包含層	土人形 土製品	(17) 57	23 -				7.5YR6/4 にぶい橙		在地	台か 中実 型合せ 孔1カ所 22.7g	M22	

第2表 互観観察表

図版 番号	番号	発掘区	遺構・層位	種別 表面処理	胎土色	釉色 表面色	法量 a 法量 b	法量 c 法量 d	法量 e 法量 f	備考	実測 番号
第9図	4	SLU70	SK03	平瓦 いぶし	N8 灰白	N6 灰	(143) (105)	18 -	- -		M5
	10	GLU140	SD03	平瓦 いぶし	N8 灰白	N5 灰	(101) (56)	22 -	- -		M10
第13図	4	GLU70	包含層	平瓦 いぶし	2.5Y8/1 灰白	N5 灰	(80) (114)	20 -	- -	刻印有	Q29
	5	GLU70- 120	包含層	平瓦 いぶし	N6 灰	N3 暗灰	(133) (86)	18 -	- -		M43
第14図	1	GLU70- 120	包含層	丸瓦 いぶし	10YR8/1 灰白	10YR2/1 黒	(153) (115) (29)	(27) -	- -		M44
	2	GLU70	包含層	軒平瓦 いぶし	N7 灰白	N4 灰	(111) (118)	20 39	- -	文様有	Q30

第3表 石製品観察表

図版 番号	番号	発掘区	遺構・層位	種別	最大長 a	最大幅 b	最大厚 c	重量 g	色調	備考	実番
第13図	1	GLU 70	包含層	炉石	357	355	(162)	10.130	10YR8/1 灰白	全面/ミ底	Q31
	2	GLU 70-120	包含層	砥石	(83)	56	6.5	52	10YR7/6 明黄褐		M36
	3	GLU 70	包含層	礬石	22		5.5	4.2	N1.5/0 黒		M25

第4表 金属製品観察表

図版 番号	番号	調査区	遺構	種別	材質	法量 a	法量 b	法量 c	法量 d	法量 e	重量 (g)	備考	実測 番号
第12図	20	GLU70	包含層	寛永通寶	銅	24.0	24.0	6.0	6.0	1.0	3.13	古寛永	Q20
	21	GLU70	包含層	寛永通寶	銅	25.0	25.0	6.0	6.0	1.0	2.81	新寛永	Q21
	22	GLU70	包含層	寛永通寶	銅	24.0	24.0	6.0	6.0	1.0	2.18	新寛永 全面錆	Q22
	23	GLU70- 120	包含層	飾り金具	銅	23.0	23.5	1.0			2.00		M37
	24	GLU70	包含層	煙管吸口	銅	130.0	6.0	11.0			14.74		Q19
	25	GLU70	包含層	包丁	鉄	177.0	55.0	20.0			180.00		Q24
26	GLU70	包含層	割弁	鉄	119.0	50.0	42.0			1210.00	クサビ残	Q23	

第4章 総括

金沢園（寛文7年）で調査地点をみると、大手町方向から横山町方向に至る道路に接して武家地であることがわかる。道路北には三軒の屋敷地があり、現在の地図と比較すると調査地点は真ん中に位置した屋敷地であった。この屋敷地は栗田久右衛門と記されている。「加能郷土辞彙」によると、二百石取りの御馬廻兼に属する家柄であるが、貞享元年六月十九日に藩の収納米を二重に売買した罪で能登に流罪となった人物で、息子源右衛門が二百石を新たに受け藩臣となったと記されている。

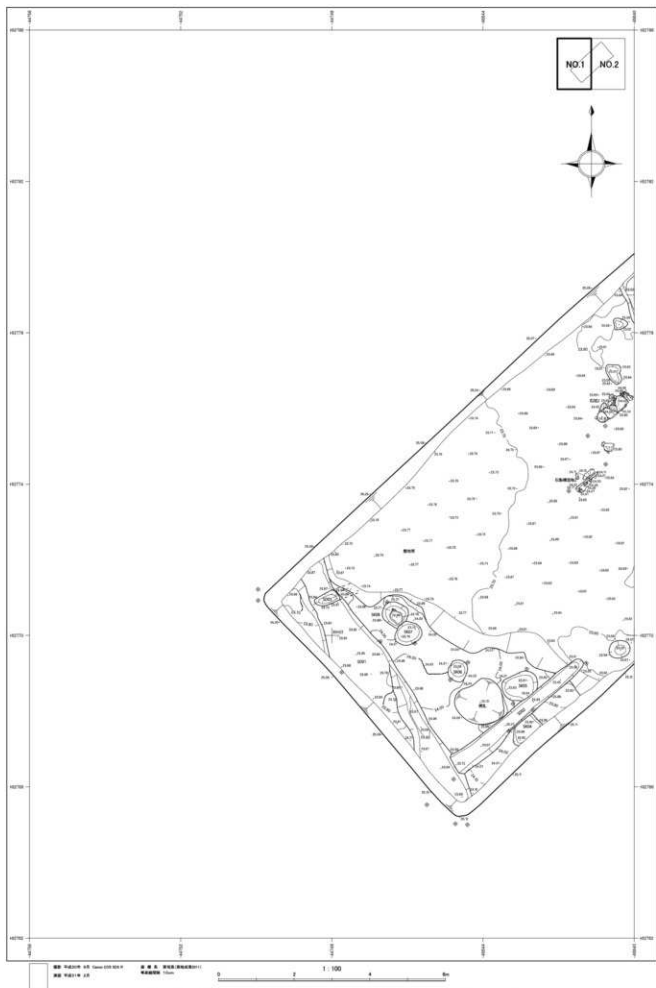
今回の調査では、調査地点の元の地形が、南から北にかけて緩やかに傾斜していた土地であったことが判明した。調査地点の北にある現在の擁壁部分は調査を実施していないが、調査区壁の土層を観察すると南側より北側へ向けて地形が傾斜していることを確認した。傾斜がある土地に江戸時代の屋敷敷が設けられていたことになる。建物の痕跡を示すものとして、SK04・SK06・SK08の柱間距離が等間隔で、SK08から礎石が見つかっていることからこれらの土坑は柱穴である可能性が高い。この他、石垣や石列は建物の周囲に巡らせたものか、何らかの区画を形成していたものと考えられる。石垣1・1とSK04・SK06・SK08はほぼ並行する。両者の位置は高低差があり、建物を建てるためには南側の高井部分では石垣等を設けず地表面に直接建築工事を行い、北側では南側の高さに近づけるため土砂による盛土や整地工事を行い、盛土が流出しないよう石垣で土止めたことが推測される。



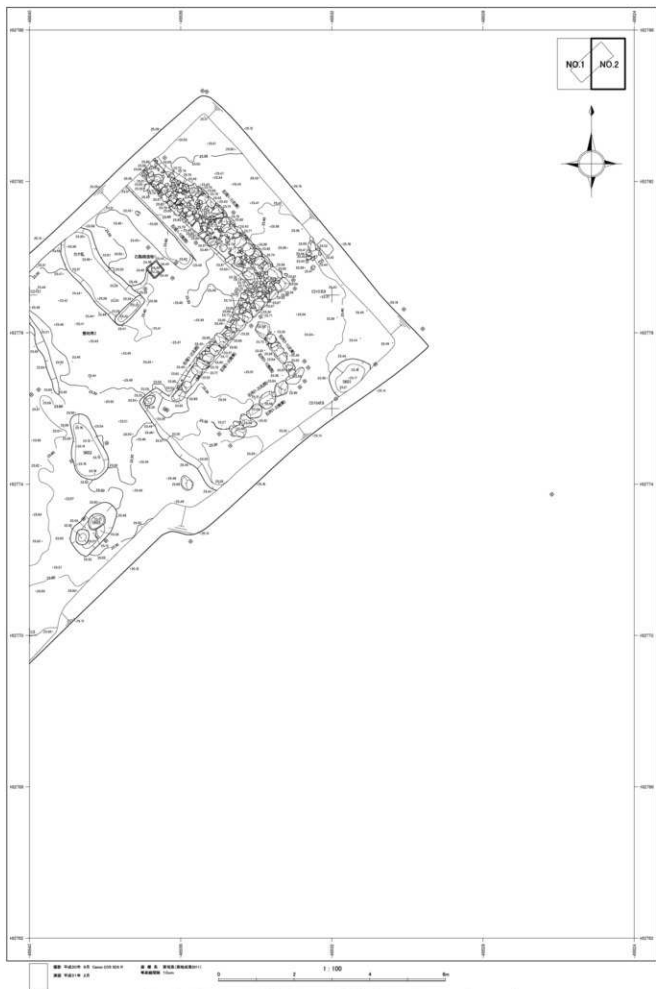
第15図 寛文七年金沢園(1667年)よりトレス



第16図 都市計画図と発掘調査区



第17図 金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)遺構平面図 NO.1(S=1/100)



第18図 金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)遺構平面図 NO.2 (S=1/100)



遺構全体写真(西から撮影)



石垣1(西から撮影)



石垣1(北東から撮影)



石垣2(北西から撮影)



石垣2(南から撮影)



石垣1と石列1(東から撮影)



石列1(北東から撮影)



SK02(南から撮影)



SK03[南東から撮影]



手前からSK04、SK06、SK07、SK08[南東から撮影]



SK08・SK07[南西から撮影]



SD01[北西から撮影]



SD02[南西から撮影]



SD03[手前 北西から撮影]



石製構造物1



石製構造物2



第9図-16・17



第9図-19



第10図-1



第10図-2



第10図-3



第10図-4



第10図-5



第10図-10



第10図-11



第10図-13



第12図-1~7



第12図-11・17~19、第13図-3



第12図-15・16



第12図-20~22・24



第12図-25・26



第13図-1

報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし かなざわじょうかまちいせき (けんろくもとまち15ばんちてん) はつくつしょうさほうこくしょ							
書名	石川県金沢市 金沢城下町遺跡 (兼六元町15番地点) 発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	327							
編著者名	新出敬子							
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番地							
発行年月日	西暦2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° - '	東経 ° - '	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
いしかわけんかなざわし かなざわじょうかまちいせき 金沢城下町遺跡 (兼六元町15番地点)	いしかわけん かなざわし 金沢市 兼六元町 19番1.20番、 21番1.21番3、 22番1	72014	-	36° 33' 57"	136° 40' 00"	2018.7.13 ～ 2018.9.27	202㎡	有料老人ホーム 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金沢城下町遺跡 (兼六元町15番地点)	城下町	江戸時代	石組、土坑、溝		近世陶磁器、近世土師器、 近世瓦、金属製品、 石製品、土製品			
要約	調査地は、金沢城の東側で城に近い武家地に位置する。遺跡からは、区画を形成していたと考えられる石垣や石列が検出された。また、建物の柱穴と考えられる土坑も確認された。							

石川県 金沢市
金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)
発掘調査報告書

(「金沢市文化財紀要」327)

令和2年(2020)3月31日発行

発行 金沢市

編集 金沢市埋蔵文化財センター

〒920-0374

石川県金沢市上安原南60番地

TEL (076) 269-2451

印刷 和巧フォームズ株式会社

〒921-8147

石川県金沢市大額2丁目67番地

TEL (076) 296-8050

